

## 研修会記録

## 弘前大学高大連携シンポジウム

## 「文章を読み解く力と文書に表現する力」について

8月7日(月)、総合教育棟2階大会議室で、「文章を読み解く力と文書に表現する力」と題してシンポジウムが開催された。矢島忠夫21世紀教育センター長から開会の挨拶を受けた後、大高明史FD・広報専門委員会委員長の司会のもとで、高校教員2名および大学教員2名による話題提供と熱の入った意見交換が行われた。参加者は30名であった。シンポジウムの内容の要点はつぎのとおりである。

## 1) 話題提供者の発表内容

## 1. 「高校教育の立場から」

## 佐藤あんず先生(弘前中央高等学校教諭)

中央高校では、教員が生徒向けに「羅針盤」(各教科各学年毎のシラバス)を独自に作成している。記載内容は、教科の目標、学習内容、学習方法、テスト、評価方法などである。国語の学習内容の特徴についてみると、1学年の「国語総合」の現代文(2単位)では、読み取り中心から「書くこと」を大切に扱う内容に移行し、小論文作成の基礎を学ばせる。2学年の現代文(理系2単位、文系3単位)では、評論や小説、詩歌・短歌・俳句などの作品を通じて読解力をつける。3学年の現代文(理系2単位、文系3単位)では、随想・小説・評論を読むことで思考力を高め、そしてセンター試験に備える。また大学入試のための小論文指導も行っている。

教育指導上の問題点としては、1学年では、授業時間が少ないために十分な「書く力」が育たないことがあげられる。2学年では、読解力を学ばせることになっているが、同様に授業時間が少ないことや様々な作品を題材に取り上げたいのだが題材が少なく、生活に密着した文章の読解は無理であること。3学年では、センター試験や大学入試の小論文試験対策に授業が傾斜せざるを得ないことがあげられる。小論文を書かせるには、下調べが重要で、その準備に時間がかかり、授業時間では間に合わないので時間外で指導している。特に理系の生徒は、大学入試で小論文を課す大学が少ないので、論文作成の訓練が不足している。その状態で大学に進むこととなる。生徒間でメールのやりとりを頻繁にしているが、話し言葉と書き言葉をとりまぜて表現していることから、「書く力」が育っていないといえない。

## 2. 「高校教育の立場から」

## 三上浩先生(弘前南高等学校教諭)

高校生の「国語力」そのものが低下している。その原因は、中学校における国語の授業時間の減少にある。旧指導要領(平成3年4月適用)と現指導要領(平成14年4月適用)における中学校1学年から3学年までの授業時間総数を比較すると、現指導要領では全授業総数が210時間減少、数学の授業総数が70時間減少、国語の授業総数が105時間減少し、相対的に国語の授業時間が大幅な減



少となった。数学、理科、社会は成績の低下が数字として現れやすいので時間数を減らしにくいのではないか。また国語教科授業時間内の「書くこと」に対する時間配分は、各学年とも2/10から3/10程度（総計でおよそ40時間の減少）となっている（中学校現指導要領）。

その結果、高校入試において「書くこと」を問う出題が少なくなり、結果的に「書くこと」に授業時間を費やさないと悪循環に陥っている。また「書く力」の基礎となる「序論・本論・結論」や「起承転結」についての表現指導は、中学校の教科書では触れられていない。実際の授業でもこのようにパターン化した表現指導をしていない。

「国語力」の低下の現状を文部科学省も把握していて、次期学習指導要領では「ゆとり」教育から「言葉の力」の教育へ方向転換することとなった。

### 3. 「21世紀教育の立場から」

#### 郡千寿子先生（弘前大学教育学部助教授）

学力が低下した学生が入学し、4年後には社会に出ることになるが、その間いかにして読解力をつけるかが問われている。21世紀教育において担うものは何か。2003年にOECD（経済協力開発機構）が行なった生徒の学習到達度調査（PISA 調査）には、41カ国27万6千人の15歳児が参加した。その結果、前回2000年の順位と比較すると、数学は1位から6位に、科学は同順位の2位で世界の中でも高い水準にあったが、読解力については8位から14位に低下し、その低下幅も参加国中最大であった。低下の要因は、下位層の子供の読解力が低下していることにある。

PISAが求めている読解力とは、自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力をいう。具体的な出題内容は以下の6つの特徴を具備している。

- ①社会で直面する生きるために必要不可欠な実地的な課題が対象になる。
- ②通常の文章は6割に過ぎず、実用的な図表や地図などが4割を占める。
- ③従来の国語の枠を越えて、理科や社会科に関連する幅広い話題が含まれる。
- ④問題形式は、自由記述式が4割で、自由記述問題の占める割合が、通常日本で行なわれる国語のテストよりかなり高い。
- ⑤読んだことについて、「書いてあることを根拠にして自分の意見を表現する」ことが求められる問題がある。つまり、「読解と表現が融合した」問題がある。
- ⑥本文の内容について「批判する」ことが求められる。

上記のPISAの読解力から判断すると、日本で読解力をつけようとする手法は、国際的な手法と大いに異なると思われる。

文部科学省は「読解力低下」の現実をふまえて、平成17年12月に「読解力向上に関する指導資料」を作成している。内容はPISAに類似している。そのなかで読解力は、国語だけではなく、各教科、総合的学習の時間など学校の教育活動全体で身につけていくべきものであり、教科等の枠を越えた共通理解と取り組みの推進が重要であるとしている。

大学の附属図書館は、学生に対して「言語力（読む力、書く力、調べる力、伝える力）」を養ってもらおうと、昨年第1回の「言語力大賞コンテスト」を実施している。文学作品部門と評論部門があり、今回は評論部門の応募はなかったが、文学作品部門にはすべての学部から応募があった。応募者12名から大賞1名と、優秀賞2名が選ばれた。総括すると、評論部門では論理思考力（言葉の応用力）が求められるが、この部門に興味を持つ学生が少ない。今の学生は批判力、思考力、書く力、表現する力、発信する力が不足している。

レポートや論文が書けない3・4年生がいる。PISAの国際水準の読解力をつけ、書く力をつけさせるには、21世紀教育や専門科目における指導の充実が望まれる。

#### 4. 「専門教育の立場から」

##### 福澤雅志先生（農学生命科学部助教授）

高校までの国語力を「読む・書く・聞く・話す」を有機的に結合する能力の育成とすると、大学での国語力は、さらに高度の情緒力・語彙力・理論的な思考力がバランスよく咀嚼されて、総合的なアウトプットを生み出すことにある。

弘前大学は「世界に発信し、地域と共に創造する」ことを目指している。世界に発信するためには、英語力の向上が不可欠である。そうすると大学の専門教育では、国語プラス英語の能力が求められる。具体的に“文章を読み解く力”とは、“読む・reading”のことで、専門書、論文、ウェブなどの内容を精読で深く理解すること、速読で広く理解すること、情報の正確な抽出ができる能力のことである。一方、“文書に表現する力”とは、“書く・writing”のことで、レポート作成、プレゼンテーションファイルの作成、論文執筆において、集めた情報に基づき自分の文章で書く能力のことである。注視することは、質の高い科学論文は平易な文章で書かれていること、また一本の明確な筋が通った平易な文章で書くことにある。

ふりかえって、今の学生は、“文章を読み解く力があるか”と問うならば、日本語では特に問題ないが、英語を読み解く力はほとんどないといえる。また“文書に表現する力があるか”と問うならば、日本語でも力があると言えない学生が多い。まして英語での表現は、ほぼ不可能と言える。

したがって、高校卒業までに、国語力（プラス英語力）の基礎を身につけていなければならない。大学では、常に英語力の向上を図ることが求められることから、21世紀教育の役割は大きいと言える。専門教育では、なによりも教員の質の向上が不可欠である。

#### 2) 意見交換

質問：高校でプレゼンテーションの時間はあるのか。

（答え）生徒に対して質問をし、その答えを求めることはしているが、プレゼンテーションの機会は時間の関係上ない。「書く」ことについては、夏休みに原稿用紙4枚から5枚程度の読書感想文を提出させている。総合学習の時間に文章表現や小論文の指導を行っているが、あまり身につけていない。

大学入試問題には、「あなたの考えはどうか」といった設問がないことから、自分の考えを書く能力を育成することができない。自分が主人公になって解答すると、「バツ」になる。PISA型とは相反する入試問題といえる。現在の入試制度のもとでは、3年の授業はPISA型と対立せざるを得ない。1・2年では、PISA型の授業は可能と思われる。

理系においても国語入試や小論文を導入し、PISA型に転換してほしい。そうすれば高校教育において、その指導体制が敷ける。

本学でPISA型読解力の向上を図るには、附属図書館を中心に高大連携で行うことが望まれる。



（註：『21世紀教育センターニュース』より転載）